

英語学力不振者の学習意欲を高める称賛の仕方とは

森脇 永至（大阪教育大学）

キーワード：学力不振者，学習意欲，称賛

1. はじめに

現在、周知の通り、教育現場において学力不振は大きな問題の一つとなっており、子どもたちの学習意欲をどう高めていくことができるのかといったことは日々現場の先生の頭を悩ませている。学習意欲に関する研究は長年に渡って多くなされてきており、数々の著書や論文が学習意欲を高めるためのさまざまな要因を挙げている。その要因の中で、称賛に関する研究はまだ数が少ない。ここでは、教師として、学力不振者の学習意欲を高めるための手法として称賛に焦点を当て、上位群と下位群（学力不振者）を比較・対照しながら、下位群を動機づけるに有効な称賛の仕方を探っていくとする。

2. 先行研究

三浦(1983)は学習意欲にかかわるものとして 1.生徒をとりまく環境の要因 2.教授の要因 3.生徒自身の要因の3つをあげ、橘(1982)は Motivation の4つの条件として、1.教師が生徒の実態を個々によく知悉している 2.「ほめる」こと 3.正しく叱ること 4.深い教材研究をあげている。三浦が挙げた3要因の中から 2.教授の要因、そして橘が挙げた4条件の中から 2.「ほめる」ことを取り上げると、教師が生徒を「ほめる」ことが生徒の学習意欲に大きく関係することがうかがえる。

また、斉藤(1970)は無視・統制群に対して、賞賛・叱責群が学習意欲を高め、中で賞賛群が最も学習意欲を高めたという結果を出しており、Anderson et al. (1976)では、学習達成が不十分であったとしても、肯定的な表現で強化すれば内的動機が高まり、無視すると内的動機が大きく減退したとしている。これらのことから、学習意欲を高めるためには、仮に不十分な達成状況であったとしても、肯定的にとらえほめていくことが必要不可欠になってくることがわかる。では、学力不振者の英語学習意欲をあげるためにどういった点を称賛すべきなのか。これを明らかにするために以下の実験を行った。

3. 実験

(1) 被験者 2 中学校の中学3年生 242 名（男子 124 名、女子 118 名）

(2) 道具 質問紙を使用。質問紙は4部構成となっており Part1 は英語の好き嫌い、できないについて、Part2 は4技能にも留意しながら、11 の状況（発問、テスト、授業態度、提出物、音読、コミュニケーション活動、英語の聞き取り、英文の内容理解、書いた英文の内容、アルファベットのきれいさ、授業中の質問）を設定し、それぞれの状況に対してどれくらいやる気がでるかを尋ねた(それぞれ4件法)。Part3 では、先ほどの Part2 の11 の状況の中で最もほめられてやる気がでる項目を3つ選んでもらい、Part4 では、これまでで最も心に残っているほめられた経験について、英語の授業内とそれ以外に分けてそれぞれ自由記述とした。

4. 結果と考察

Part1 で英語が好き・できる（4件法で3または4）と答えた生徒を上位群、英語が嫌い・できない（1または2）と答えた生徒を下位群とした結果、上位群 60 名、下位群 94 名となり、英語学力不振者が多く存在することが判明した。

Part2 において、平均値は上位群がすべての項目において優っており、有意に差があることが示された。このことから、上位群の方が下位群より称賛で動機づけられることがわかるが、下位群はほめられる経験自体が少ないことも挙げられよう。また、高い平均値を示した上位5項目を挙げたところ、右の表のようになった。

表 1 : Part2 における平均値上位 5 項目

Rank	Higher group	Lower group
1 st	Tests	Tests
2 nd	Sentences they wrote	Sentences they wrote
3 rd	Communicative activities	Assignments
4 th	Answer the teachers' questions	Reading and understanding English texts
5 th	Attitude	Answer the teachers' questions

両群ともに 1 位にテストが挙げられ、これに加えて、Part3 でも両群ともに 1 位にテストが挙げられた。また、割合で言えば上位群 68%、下位群 85%と下位群の方が上回る結果となった。よって、テストに関しての称賛が下位群の学習意欲を最も高め、テストにおける成功体験が効果的であることが言えた。現在の教育現場において、テストが重視されている（成績や内申の観点から）ことが原因としてあげられよう。また、Part2,3 を通して、書いた英文の内容や、英文の内容理解と言った点が両群において上位に挙げられていた。それに加えて上位群に関しては、コミュニケーション活動が Part2 では 3 位、Part3 でも 31%（下位群は 12%）を占めていた。これらのことから、タスク達成の難しさも考えられるだろうが、英語学習者は 4 技能のうちまずは reading, writing と言った written communication を重視しており、読み書きが十分にできてから listening, speaking と言った oral communication を重視する傾向があることが示唆される。上位群にとって、読み書きはある程度十分できており、自身の英語をより高めようと「コミュニケーション活動」へ重点を置いていると考えられる。それに対し、下位群は読み書きに関する項目で高い数値・割合を示していたこと、「アルファベットのきれいさ」が上位群では 5%だったのに対し、下位群では 19%に及んでいることから読み書きに重点を置いていることが受け取れる。これらから学力不振者の学習意欲を上げていくためにはしっかりと読み書きのスキルを育ててあげて、成功体験、自信を持たせること、またそれと同時に話したり、聞いたりといったスキルも同時に育てていくための手立ても必要とされることがわかる。

表 2 : Part4 における記述率

	All students	Higher group	Lower group
During English classes	41.6%	60.0%	28.7%
Outside English classes	51.9%	68.3%	43.6%

Part4 においては、記述率において、上位群が英語の授業内、それ以外のどちらの状況においても下位群を上回っていたことから、下位群は上位群より、ほめられる経験自体が少ないことがうかがえる。誰から称賛を受けたかに関しては、英語の授業内では JET が、それ以外では家族が最も多く、称賛の内容に関してはどちらの状況においてもテストが一番多くみられた。家庭と学校との繋がりを連絡帳や家庭訪問などを有効活用しながら強化していくことも必要とされよう。また、「ほめられた経験がない」「ほめられても心に残らない」と書いていた生徒もいた。教師が開かれた心でしっかりと寄り添いながら、生徒との良好な人間関係の構築も求められていることも見て取ることができた。

全体を通して、テストが一番の motivator となったことから、テスト作成の改善が必要とされる。また、生徒たちがより多くの称賛を受けることができるよう多様なほめ方を教師は考えていく必要があろう。

5. 引用文献

- Anderson, R., Manoogian, S. T., & Reznick, J. S. (1976). The undermining and enhancing of intrinsic motivation in preschool children. *Psychological Abstracts*, 57 (5), 1977.
- 三浦省五(編)(1983)『英語の学習意欲』東京:大修館書店
- 斉藤和代(1970)「ほめる人・叱る人と学習意欲」『教育心理』,第 18 号,4 巻,26-29 (278-281)
- 橘健(1982)『意欲を起こさせる英語指導』[How To Motivate Your Students] 東京:大修館書店